

「聖書翻訳 ー未来への遺産ー」

吉田 新

はじめに

最初に、次の言葉の引用から始めたいと思います。

…そこで読者にお願いします。素直な心でこの書物を精読してほしい。我々は、懸命に努力したのであるが、上手に翻訳されていない語句もあると思われるので、そのような個所についてはどうかお許し願いたい。というのは、元来ヘブライ語で書かれているものを他の言語に翻訳すると、それは同じ意味合いを持たなくなってしまうからである。この書物だけではなく、律法の書それ自体と預言者の書および他の書物でさえも、いったん翻訳されると、原著に表現されているものと少なからず相違してくるのである。

これは誰の発言か、お分かりになる方はいらっしゃいますか。今回の新聖書翻訳事業に携わる訳者の告白だと思われるかもしれませんが、しかし、実は違います。これは、聖書からの引用です。旧約聖書続編に含まれる「シラ書(集会の書)」の序言です(新共同訳より)。「シラ書」は紀元前190年頃、著者と考えられるベン・シラがヘブライ語で記した書物です。その後、紀元前132年頃、エジプトにおいて彼の孫が祖父の著をギリシア語に訳します。翻訳の事情を記したのが、先にご紹介した序言です。

2000年以上前、ベン・シラの孫が翻訳作業の際に抱いた悩みは、現在、日本聖書協会が進めている新聖書翻訳事業に携わる多くの方の共通の悩みだと思います。いや、もしかしたら、有史以来、聖書翻訳に携わるすべての人たちの悩みかもしれません。ヘブライ語、アラム語、ギリシア語と日本語とは、「少なからず相違」しておりますので、翻訳者たちは「懸命に努力したのであるが、上手に翻訳されていない語句もあると思われるので、そのような個所についてはどうかお許し願いたい」という思いを抱きます。聖書の言葉を言語体系が全く異なる日本語に置き換える作業は、容易ではありません。

聖書はなぜ訳され、そして、訳され続けるのでしょうか。昨年、キリスト新聞社が行ったアンケートで「新しい聖書翻訳に何を望むか」という問いかけに対し、「必要性を感じない」「使い捨てのような聖書は出さないでほしい」「たびたび翻訳を重ねるとどの聖書も定着しない」という意見がありました。確かに、どのご意見ももつともだと思います。しかし、何度も翻訳が試みられるのは、その言葉を伝える際に必ず起こる、少なからずの相違をできるだけ埋めていこうという願いがあるからです。原文と置き換えられる言語を可能

な限り近づきたいのです。

研究は常に前進しています。聖書考古学はさまざまな新しい発見を公にします。聖書の本文批評学はそれまでとは違ったテキストの読みを採用します。翻訳理論も変わります。ですから、その時代の英知を結集して、相違を縮め、次の世代の人々に託す。次の時代には、新しい英知が相違を縮める努力を続けます。聖書の翻訳作業に終わりはありません。いまの時代の翻訳は、次の時代に引き継がれる遺産、未来への遺産です。私は 1978 年、共同訳聖書が出版された時に生まれました。私にとって聖書は、文語訳でも口語訳でもありません。新共同訳です。私たちがいま送り出そうとしている聖書は、次の世代、私たちの子どもや孫の聖書になるでしょう。

また、相違を縮める際に配慮しなければいけないことがあります。置き換えられる訳文 - 私たちにとっては日本語 - を読み、聴く人が、どのように反応するかです。聖書の言葉によって、一人の人生が大きく変わることがあります。ですから、翻訳者は原典に忠実であることを第一に考え、原文との相違を縮める努力を続けつつも、常にそれを読む人、聴く人のことを念頭に置く必要があります。彼、彼女らが読んで理解できるか、また読んで心に響くかということです。訳者は原典への忠実さと、読み手、聴き手への忠実さの二つの間で揺れ動きます。

本日は、これまでの日本における聖書翻訳の遺産を振り返りながら、現在、取り組んでいる新聖書翻訳事業の一部を紹介したいと思います。日本での聖書翻訳の現場では、いかなる問題が生じたのかを確かめながら、次の世代の人々に私たちは、どのような翻訳を残していけるかを皆さんと一緒に考えたいと思います。

1 和訳聖書翻訳の黎明期

それでは、まず、これまでの和訳聖書翻訳の歴史を簡単に振り返りたいと思います。少し、歴史に関する説明が長くなるかもしれませんが、しかし、新しい聖書翻訳が和訳聖書の歴史上、どのように位置づけられるかを知る上で必要であると考えます。

日本語に訳された最初の聖書は、次の言葉から始まります。

ハジマリニ カシコイモノゴザル。コノカシコイモノ ゴクラクト トモニゴザル。コノカシコイモノゴクラク。

これは、ヨハネ福音書の冒頭句の訳です。1837 年にカール・ギュツラフがシンガポールで出版した『約翰福音之伝』（ヨハネによる福音書）の一文です。まだ、日本がキリスト教の禁教令下にあるため、ギュツラフは日本の地に足を踏み入れることをできず、日本での

宣教を希望しつつ、マカオにおいて日本人漂流民の岩吉らと共に聖書翻訳に取り組みました。ギョツラフに続き、琉球で医者として滞在していたバーナード・ジャン・ベッテルハイムは、ルカ福音書などを琉球語に翻訳し、後に和訳にも従事します。

日本国内で初めて訳された聖書は、アメリカ人宣教師ジョナサン・ゴープルが 1871 年に公にした『摩太福音書』（マタイ福音書）です。ゴープル訳マタイ福音書 12 章 3-4 節の訳文を紹介したいと思います。

イエスウ彼らにのたもうた。「あなたはダビドと彼に伴なうものが、飢えたときの致したことを読まざるか。それ神の御社（おんやしろ）にはいった。また和尚さんばかり食べべきのお供物（くもつ）を、ダビドと供にも、無礼に食べたりくるゝか。…」

この箇所を現在、用いている新共同訳の訳文と比べてみると、その違いがはっきり分かります。

そこで、イエスは言われた。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか。…」

ゴープルの訳文は「神の家（神殿）」を「御社」、「祭司」を「和尚さん」、「供えのパン」を「お供物」などと訳し、仏教用語もためらいなく使用しています。なぜ、ゴープルはこのように訳したのでしょうか。彼は高い教育を受けていない普通の日本人でも理解できるように、平易な日本語で訳そうと試みたからです。ゴープルは、日本でのキリスト教伝道に関して次のような発言を残しています。

日本の教会は、その形式を日本化し、日本人の感情や趣味に適するように、教会堂は寄席風に、讃美歌は端唄や都々逸にならい、楽器はオルガンを止めて三味線や琴を用いよ。

聖書翻訳だけではなく、日本での宣教において、キリスト教を大胆に日本の文化に置き換えようと彼は望みました。彼が聖書を訳すときに、まず優先したのは聖書を読み、聴く人にとっての分かりやすさです。しかしながら、このようなゴープルの姿勢が他の宣教師らに共有されたかといえば、そうではありません。

ゴープルの「マタイ福音書」が公にされた同じ時期、J・C・ヘボン、S・R・ブラウンをはじめとするプロテスタント宣教師たちによって、聖書翻訳委員会（翻訳委員社中）が組織されます。ゴープルはこの組織には入っていません。翻訳委員会の訳は文語訳聖書として定着し、現在、日本聖書協会が刊行している翻訳の原型にあたります。それを確かめる

ために、翻訳委員会が先と同じ箇所をどのように訳したのかを確かめます。1881年（明治14年）の「新約全書」の訳文は、次のようなものです。

これ^{これ}に^{こたへ}答^{こたへ}ける^{こたへ}は^{こたへ}ダビデ^{こたへ}および^{こたへ}従^{とも}に^{あり}在^{あり}し者^{あり}の^{あり}饑^{あり}しとき^{あり}行^{あり}し事^{あり}を^{あり}未^{あり}だ^{あり}讀^{あり}ざる^{あり}乎^{あり} 即^{すなわ}ち^{すなわ}神^みの^{みや}殿^{みや}に^み
入^{いり}て^{いり}祭^{さい}司^しの^し他^{ほか}は^{おのれ}己^{おのれ}および^{とも}従^{とも}に^{とも}を^{とも}る^{とも}者^{とも}も^{とも}食^{くら}ふ^{くら}ま^{くら}じ^{くら}き^{くら}供^{そなへ}の^{そなへ}パン^{そなへ}を^{そなへ}食^{くら}へり

このようにしてみると訳文の構造だけではなく、「神殿」「祭司」「供えのパン」など、現在、使用されている訳語の多くがこの翻訳を基にしていることが理解できます。この翻訳の訳語選定には、それ以前に訳された漢訳聖書が参考にされています。ヘボンらの聖書翻訳委員会の特徴は三つあります。まず、① 参考にしたのは漢訳聖書、② 日本人助手はいずれも漢学の素養がある。そして、③ 格調高い日本語を目指していることです。

ヘボン、ブラウンたちの翻訳は、漢字が読め、ある程度の教養がある知識階級を讀者として想定したのに対し、ゴープルは、全国民が平等に使用できる聖書が望ましいと考え、平仮名による表記を試みました。実際、ゴープルは無学な人々に自身の聖書翻訳を配布しました。漢語や漢文の素養がある社会的階層の高い讀者を想定しておらず、一般人を讀者に想定しているからです。ヘボンらによる翻訳は、日本語としての格調高さ、美しさを目指しています。その際、漢文風の訳文を志しました。教養ある人が聖書を読んで、心に響くためには、訳文は原典に忠実であることもさることながら、日本語としての美しさを維持しなくてはなりません。実際、ヘボンらの訳文は、いまでも聴いていて品位を感じさせます。もちろん、ヘボン、ブラウンらの中には堅い漢文風の文体を好まない意見もありましたが、結果として漢文風になった経緯を、補佐役の一人であった井深梶之助がその回想で述べています。以下、現代語に置き換えたものを記します。

翻訳の文体については、堅い漢文風にしようという説と、できるだけ通俗的にしようという説と二つに別れ、支那訳（中国語訳）に信頼した補佐役方には、自然と漢文風に流れんとする傾向があった。ブラウン先生は、終始その傾向と戦ったことを話されたように記憶する。せっかく聖書を日本語に翻訳しても、ただ少数の学者だけに読めて普通の人民に読めぬようでは、何の益があるかとは、先生のしばしば繰り返された議論であった。

結果的に翻訳委員会の訳文は、補佐役の日本人、その多くが旧氏族階級属する人物たちの知的レベルに沿った訳文に仕上がります。ここで一つのことことが分かります。和訳聖書翻訳の黎明期において、訳文としての読みやすい、分かりやすさを追求するか、またはその美しさかを求めるのか、という二つの志向が存在したことです。それは、どのような讀者をその対象として想定しているかという問いと関係してきますが、いずれも共通すること

は、聖書翻訳は常に読む人、聴く人の反応を念頭に置くということです。当時の翻訳作業において原典に忠実であることも当然、重視されていたと思いますが、むしろ、読み手、聴き手の反応ということに重きを置いていたのではないかと私は考えます。

歴史上、ゴープルの翻訳は表舞台には出ず、ヘボンらの翻訳が和訳聖書のメインストリームになります。訳文の平易さか、または厳かさか。そして、どのような読者を対象として考えるか、という問いは、後の聖書翻訳作業、そして現在、取り組んでいる新聖書翻訳事業においても問題になります。いうならば、聖書翻訳は常にこの問いと向かいあっていると いえます。

2 戦後の和訳聖書翻訳

さて、時代はいっきに下り、戦後の聖書翻訳の事情を振り返ります。ここでも先の問いと向き合います。戦後、1951年に口語訳聖書翻訳作業が開始されます。それまで、ヘボン、ブラウンらによる文語訳聖書を教会で用いていましたが、これを口語に訳し直す必要性が求められました。戦時中、文語訳聖書の改訂作業が始められ、戦後もしばらくその作業は継続しますが、文語の改訳に関する諸問題に関して各方面からの意見を聞いた際、文体を口語体とする意見が六割、文語体にする方がよいという意見が四割ありました。そのため、文語訳聖書を改訂せず、新しく口語訳聖書を出版する方針が打ち出されたのです。口語訳聖書の方針をまとめると、次の三つになります。① 原本であるネストレ校訂の最新版を使用する。② 最新の聖書学の成果を考慮する。そして、③ 平易で誰でも分かる日本語訳を目指すことです。③に関して、訳者の一人である松本卓夫は口語訳聖書の特質について次のように述べています。

口語体の文が文語体のに比して、文章が長くなり、引きしまりがなくなりがちであって、漢文調のもつ簡潔さや荘重味を、それに求めがたいのは事実である。しかし、その半面、口語文には、いかめしい漢文調の文章には見出されない読みやすさ、わかりやすさ、親しみ、じかに訴えるものがある。読みにくい解らない聖書をありがたがる時代は、はや過ぎ去ったのであり、まだ過ぎ去っていないとしたら、一日も早く過ぎ去らせるのがよいと思う。聖書は民衆の書である。だれでも読める書、わかる書であるべきである。

この松本の言葉から分かりますように、戦後の口語訳聖書翻訳作業においても、和訳聖書翻訳の黎明期と同じ問題と向かい合います。分かりやすさか、格調高さかという問いです。戦後の口語訳聖書は - ゴープル訳までとは言いませんが - 平易さ、分かりやすさに重心を置きます。

この姿勢は、その後の日本聖書協会による共同訳聖書にも引き継がれます。口語訳聖書が公になってから、20年近く経過した後、再び、新しい聖書翻訳を求める動きが教会の中で起こり始めます。1968年、日本聖書協会理事会は新しい聖書の翻訳を日本の教会のために、また教会外の一般のために取り組むことを決議します。エキュメニズムの流れをうけて、新しい翻訳はカトリック、プロテスタント両教会による共同作業の必要性が求められました。1972年に共同訳聖書の翻訳の目標が打ち出されます。そこには、「今まで聖書に触れていない多くの人々のために、大衆的で、かつ学問的な翻訳を目指す」とうたわれています。この場合、「大衆的」という言葉が重要になるでしょう。聖書を「民衆の書」として、誰でも分かる、平易な翻訳を目指すということです。ここで再び、先のゴープルの方針が思い出されます。口語訳聖書と同じように、共同訳も同じ路線、いや、その路線を徹底化します。それまで、聖書翻訳は教会の内側に向けて発信されがちでしたが、共同訳は教会の外の人々を対象にした翻訳を目指しました。

その具体的な方法として、新しい翻訳理論を採用します。E・ナイダによって提唱され、原典の持つ意味を伝えるため、かなり大胆な意識を行うダイナミック・エクィヴァレンス（動的等価訳）理論に基づく翻訳を心掛けます。

この共同訳作業は多くの困難を伴いました。イエスカイエススか、ルカカルカス、などの固有名表記の問題、また翻訳の作業グループが多岐にわたり、委員会開催が困難を極めたことなどです。幾多の艱難を超え、1978年に「新約聖書 共同訳」が完成します。しかし、この共同訳は出版してからすぐに改訂作業が始まります。多くの改訂助言が翻訳者や各種委員からあり、また、読者からの批判的意見（たとえば、先の固有名表記に関してなど）もあったため、改訂を迫られたのです。

しかし、もっと深刻な問題は採用した翻訳理論に関して、訳者たちの受け取り方に違いが生まれたことです。そのため、聖書協会は翻訳の基本性格の転換を行います。「教会外の人々に分かりやすい聖書」から「教会内の人々が納得し、かつ使うものを作る方がより適切ではないか」という方向に変わるのです。1983年、共同訳の基本方針の一部を変更し、「聖書協会が奉仕すべき教会の行う伝道は、教会を無視した聖書で行えるはずのものではない。それゆえ共同訳聖書の出版に当たっては、これを教会での使用を考慮したものに改めることに賛成する」という答申を翻訳特別委員会は理事会に提出します。

1987年、ついに「新共同訳 聖書」が出版されます。先の基本方針の変更により、翻訳理論を動的等価訳理論から、原語と訳語を逐語的に対応させて訳すフォーマル・コレスポンドンス訳にし、固有名詞の表記をイエススからイエスという伝統訳に戻すなどの、共同訳から大小の変更が訳文に加えられました。18年という歳月を費やした訳業は、ここに完成

します。新共同訳の成果は甚大なものであると思います。まず、共同訳というエキュメニズムの成果、これまでの和訳聖書は海外の聖書協会などの資金援助によって支えられた翻訳でしたが、新共同訳は国内資金だけで賄われた最初のもので、しかし、翻訳方針の変更などの紆余曲折を経て出版された新共同訳は、多くの課題を残したこともまた事実です。次にその課題を確認しながら、新聖書翻訳が目指している方向についてお話ししたいと思います。

3 新聖書翻訳が指すもの

新共同訳の問題点として、次のようなものがあげられます。全巻にわたる訳語の不統一性、敬語表現の問題、訳文精度のムラなどです。そして、新共同訳が当初、計画していましたが、実現できなかったものとして、本文注をつけることです。このことを踏まえ、2010年に日本聖書協会は聖書翻訳事業を開始し、次のような翻訳方針を打ち出します。

- 1 共同訳事業の延長とし、日本の教会の標準訳聖書となること、またすべてのキリスト教会での使用を目指す
- 2 礼拝に用いることを主要な目的とする。そのため、礼拝での朗読にふさわしい、格調高い美しい日本語訳を目指す
(…)
- 7 その出版に際して、異読、ならびに地理や文化的背景などを説明する註、引照聖句、重要語句を解説する巻末解説、小見出し、章節、地図や年表、などの本文以外の部分は、できる限りさまざまな組み合わせを考え、読者のニーズに答える努力をする。

ここで再び、和訳聖書翻訳がその作業のなかで抱える問題を見出します。そうです。分かりやすさか、格調高さかです。先にご紹介したキリスト新聞社が行ったアンケートによりますと、新しい聖書翻訳に望むことの第一として「原典への忠実さ」(教職 43. 8% 信徒 43. 1%)、それに続いて「読みやすさ」(26%)、「文学的美しさ」(13%)、「使いやすさ」(12%)となっています。聖書協会が指すものと、聖書を読む方々のニーズは一致しています。

分かりやすさか、格調高さか、新聖書翻訳はこの二つを求めています。まず、日本語としての美しさを重んじる訳文です。和訳聖書翻訳の歴史からみまると、口語訳、共同訳、新共同訳の志向から、もう一度、ヘボンらによる文語訳への揺り戻しです。それは、漢文調の文語訳に戻すということではなく、文語訳の持つ日本語としての響きなどを現代語でも目指したいということです。これを読んで分かる、そして、聴いていて心地よい訳文になるように心がけることです。具体的に言えば、礼拝での朗読に耐えうる翻訳を目標に据えています。これは、先にみた新共同訳における敬語の不統一、訳文のムラなどの反省を

踏まえたものです。

このような翻訳方針を実現するため、今回はスコ-pos理論という新しい翻訳理論を採用しています。スコ-pos（機能、目的、目標）理論とは、何の目的で（機能）、誰に（聴衆）、翻訳後のテキストが必要とされるのかをあらかじめ定めて、翻訳するものです。今回の聖書翻訳のスコ-posは、「カトリックとプロテスタント教会の礼拝、礼典において教職者と信徒が、聖書を「信仰の書」として読むこと」にあります。ですから、このスコ-posに沿って、逐語訳か敷衍訳（自由訳）かを決定できます。また、格調高い、美しい日本語訳を目指すため、原文担当と日本語担当とを初期の段階から一組にして、訳文を推敲します。

しかし、日本語としての荘厳さだけを求めるのではなく、分かりやすさも同時に追求します。少なからずの相違のある原文をそのまま訳したのでは分からない場合は、大胆な意訳が求められます。共同訳や新共同訳が行ったように、新聖書翻訳も分かりやすさを第一に考え、文脈に応じて、敷衍訳を試みています。しかし、その際、原文のニュアンスを伝えるために本文注で補います。原典への忠実さを可能な限り守るために、最低限の注は必要と考えます。

新聖書翻訳は、和訳聖書翻訳が当初から問題とされていた訳文としての分かりやすさと厳かさを同時に求めるという野心的な聖書翻訳になります。それでは最後に、具体的な訳文を取り上げながら、この点を皆さんと一緒に確かめたいと思います。今日は、「ペトロの手紙 一」を取り上げます。1章1節から2節は、「新共同訳」では以下のように訳されています。

1 イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たちへ。 2 あなたがたは、父である神があらかじめ立てられた御計画に基づいて、“霊”によって聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、また、その血を注ぎかけていただくために選ばれたのです。恵みと平和が、あなたがたにますます豊かに与えられるように。

この訳文を原文と比較し、その相違を確かめながら読んでみましょう。まず、新共同訳の訳文では二文に区切られていますが、原文では2節まで一文として続いています。「選ばれた」という単語も、原文では一回だけです。新共同訳では「選ばれた」を二回訳し、補っています。ここで、I ペトロ書の送り手は、読者が選ばれた存在であることをまず示し、その選びの理由を記しています。「あらかじめ立てられた御計画に基づいて」選ばれたということです。この語句は原文では、「神の予知」とだけ記されています。新共同訳はこの語句を大胆に意識し、分かりやすさを追求します。ダイナミック・エクィヴァレンス（動的

等価訳) 理論に基づく訳文です。また、読者は「霊によって聖なる者とされる」と記されます。この語句も原文では単に「霊の聖化」ですので、ここでも新共同訳は敷衍訳を試みています。新共同訳は原典への忠実さと比べて、分かりやすさを求めていることが分かります。では、比較対象として、原典に忠実に訳すことを目指した二つの翻訳を紹介します。まず、岩波書店の新約聖書翻訳委員会訳です。

1 イエス・キリストの使徒ペトロが、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、およびビティニアに仮住まいをしている選ばれた人々に、 2 つまり、父なる神の予知によって [選ばれ]、霊によって聖化されており、イエス・キリストに従い、その血を注ぎかけられるようにと [選ばれた人々に挨拶を送る]。あなたがたに恵みと平和が増し加えられるように。

次に、田川建三訳もみていきましょう。

1 ペトロ、イエス・キリストの使徒、ポントス、ガラティア、カッパドキア、アジア、ビティニアの散在の選ばれた寄留者たちへ、 2 (すなわち)、父なる神の予知に応じ、霊の聖化において、イエス・キリストの従順及び血の注ぎへと (向かっている者たちへ)。恵みがあなた方にあるように、また平和が満ちて。

二つの訳文では、先ほど確認した「神の予知」、「霊の聖化」をそのまま日本語に置き換えています。新聖書翻訳はどのような訳文を試みたのでしょうか。まず、原文担当者が最初に提示した初稿は次のようなものです。

1 イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散し、仮住まいをしている選ばれた人々、 2 すなわち、父である神の予知により、霊によって聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、その血を注ぎかけられるために選ばれた人々へ。恵みと平和が、あなたがたにますます豊かに与えられるように。

この訳文に関して、日本語担当者からどのようなコメントがあったかを紹介します。まず、懸案になっている「神の予知」という言葉です。担当者からは「「予知」は日本では「地震予知」を想起させるので避けるべき」という否定的な意見が出されました。しかし、他の担当者からは「「予知」の方がすっきりしており、むしろ敷衍訳は避けるべきである」という反論もありました。また、1節と2節をつなぐために補った「すなわち」も、日本語担当者からは必要ないという意見が提出されました。朗読する際、接続詞「すなわち」は日本語のリズムを削ぎ、邪魔になるのではという見解です。さらに、これは別の原文担当

者から「その血を注ぎかけられるために選ばれた」という訳文に関して、「その血を注ぎかけられるため」ではなく、「その血の注ぎを受けるため」の方がベターである。日本語はできるだけ受け身は使わない方が自然な訳になる」という意見が出されました。確かに、「れる、られる」の受け身の助動詞は読みにくく、分かりにくいです。担当者たちの協議の結果、次のような改訂稿が出されました。

1 イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散し、寄留者である選ばれた人々、 2 すなわち、父なる a 神があらかじめご存じのことに従って、霊により聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、その血を注がれるために選ばれた人々へ。恵みと平和が、あなたがたに豊かに与えられますように。

a : 「神の予知」

改訂稿では「神の予知」が却下され、意味を取った敷衍訳に戻されています。しかし、新共同訳の「神があらかじめ立てられた御計画に基づいて」ではなく、「神があらかじめご存じのことに従って」です。原語 (prognosis) が持つ「知る」という意味を可能な限り生かし、なおかつ日本語として分かりやすさを求めた結果です。接続語「すなわち」は、そのまま残し、「注ぎかけられるため」も「注がれるために」と若干、簡略化されています。この校正稿がさらに各種の委員会で協議された結果、最終稿に近い現段階ではどのようになっているのでしょうか。いくつかの変更点がありますが、改定稿がそのまま踏襲されています。

1 イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散し、寄留している選ばれた人々、 2 すなわち、父なる a 神があらかじめご存じのことに従って、霊により聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、その血を注がれるために選ばれた人々へ。恵みと平和が、あなたがたに豊かに与えられますように。

a 直訳「神の予知により」

今回、新聖書翻訳は初稿の段階から日本語の担当者と共に訳文を練るので、日本語の幅が格段に広がるという利点があります。原文担当者は原典への忠実さを第一に重んじますので、日本語担当者から出される助言に助けられます。また、スコポス (目標) がはっきりしているため、その基準に照らして訳せるので、直訳と敷衍訳 (自由訳) の判断がしやすいです。しかし、礼拝 (典礼) での日本語朗読が重視されるため、原文のリズムを無視

しがちという難点もあります。例で示しましたように、原典への忠実さをできるだけ守るために本文注が取り入れられましたが、何でも註で解決してしまいがちというデメリットもあります。今回の訳者たちも原典への忠実さと、読み手、聴き手への忠実さの二つの間で揺れ動いています。

おわりに

さて、最後にこれまでお話ししてきた内容を簡単に振り返りたいと思います。新しい聖書翻訳事業は、ゴープル、ヘボン、ブラウンの翻訳、そして文語訳、口語訳、新共同訳の遺産を継承し、さらに次の世代に残す働きです。聖書が読まれ続けるためには、翻訳は永遠に続けられます。そして、和訳聖書翻訳の歴史を振り返りますと、常に同じ問題と直面すること気づかされます。原典への忠誠を誓い、原語との相違を縮めつつも、置き換える言語の分かりやすさを追求するか、または格調高さを求めるかという問いと格闘します。新聖書翻訳はこの二つを追い求める斬新的な試みを行っています。それが成功するか否かを見極めるのは、まだもう少し時間が必要です。翻訳者たちは「懸命に努力」を続けています。最初にご紹介した「シラ書」の序言は、次のような言葉で結ばれています。今回の翻訳事業の関係者たちすべてが、「シラ書」の訳者と同じ思いを抱いていることを、最後に皆さまにお伝えいたしたいと思います。

…律法に適った生き方をしようとの志を強く抱いている人たちのためにも、本書を完成させて公にしよう、しばしば徹夜して、また、あらゆる知識を駆使して、この仕事に取りかかったのである。